

## 正副議長就任記者会見 会見録（概要）

日 時：令和8年5月19日 14時20分～

場 所：議事堂6階 602会議室

（記者）まずはご就任おめでとうございます。

（議長・副議長）ありがとうございます。

（記者）藤田議長、津田副議長それぞれまずですね、ご就任にあたって一言、意気込み等含めてお願いしたいんですが、まず議長のほうから。

（議長）このたび、三重県議会の議長を就任させていただくことになりまして、この議長という職責に関して、使命、責任、非常に重いものがあると思っておりますし、そういう意味では、身の引き締まる思いで対応させていただきたい、そんな思いでございます。そして、県民の皆さん方の負託に応えるために、いろんな努力をしてみたいと考えております。当然、津田副議長ともども対応させていただきたいと考えております。三重県議会というのは、議会基本条例を全国で初めて作ったという、いわゆる歴史のある議会でありますので、その二元代表制というものを1歩でも2歩でも前に進めていけたらと思っております。議会としての機能であります、執行部に対する検証であったり、あるいは政策提言をして、そんなところも頑張ってみりたいと考えております。以上でございます。

（記者）副議長のほうからもお願いします。

（副議長）このたび副議長に就任をさせていただきました津田健児でございます。副議長の役割として、しっかりと藤田議長を支えてみたいと思っております。日頃から藤田議長には大変お世話になっておりますし、気心の知れた、会派は違いますけれども、関係でございますので、議長とともに連携をしながら、スムーズな議会運営が図られるように頑張ってみりたいと思っております。三重県は、自民系、新政みえ系、非常な、他県にはない微妙なバランスの中で、十数年やってきました。かつては、過半数を取れば正副独占する、それをやり合った時期もございましたけれども、ここ8年間は、議長、副議長を分けながら円滑な議会運営に努めてまいったつもりでございます。それに対して、おかしいんじゃないかっていう方もみえるかもしれませんが、表明会のときにお話をさせていただいたように、県議会というのは、いろんな背景を持った議員の集まりでございますので、そういった議員の思いを、熱心な議論の中で、成果物、ものができるように努めてみたいと思っております。

（記者）続けて質問させていただきます。まず議長にお尋ねするんですが、所信表明会の

際に、傍聴に来られた子育て中の方、託児や保育に関する制度、環境を整えたいというようなご発言がありました。もう少しこう具体的に思いであったりとか、あとはもしご自身の中で、実施に向けたスケジュールっていか目途のようなものがあれば、お尋ねしたいんですけども。

(議長) やはり議会の改革でございますので、これは皆様方にお諮りをしてということになろうかと思っておりますけども。子育て中の若い、女性に限ったことではないと思っておりますけども、子どもさんを連れてきたときにそれを預かる、あるいは授乳をする、そういう場所をやっぱり作っていかないと駄目なんだろうなという思いもございまして、昨年の男女共同参画委員会、都道府県議長会の委員会もあって、そこでも指摘されておりますし、そういう指摘を具体的にしていく一つの方法として、この1年間で取り組んでいきたい、結果は今年度できるかどうかわかりませんが、その道筋がつけられたらなと思っております。

(記者) 具体的な議論の場所、土台としては、例えば議会改革推進会議なのか、代表者会議なのか、議会運営委員会なのか、どのようなことを想定されてますか。

(議長) その辺は相談しながら、各党派、副議長とも相談しながら、どういう順番がいいのか検討しながらということになろうかと思っております。

(記者) 議論の方法もこれから相談されるということですね。津田副議長にも1点お尋ねします。知事や執行部に比べて、議会の情報発信力が弱いというようなご意見も、所信表明会でありました。県議会新聞のことも挙げていただきましたけど、具体的に発信力強化する手法として、今お考えであることであったりとか今の課題であったり、なぜ発信力が低くなっているんだろうかっていうところも含めてご意見あれば。

(副議長) まずは、本当に、逆質問になりますけれど、やっぱり議長が発するものよりも、やっぱり知事が発するものを、皆さん一生懸命聞こうとするし、撮ろうとする、それも非常に大きいと思うので、その辺についてはしっかりと議長をマークをしていただいて、議長の発することを大々的に宣伝していただければと思います。先ほども若いお母さん方が、議会を身近に感じていただけるような、いろんなお話をされておられましたけども、そういったこともしっかりと宣伝を、どういう会議体になるのかわかりませんが宣伝いただければと。みえ県議会新聞につきましては、本当に申し訳ないけれども、玄関にダーツと積んであるときもございまして。内容を少しちょっと子ども向け学生向けに変えていただいて、学校なんかには、子どもや生徒に配られるようなことができたらと思っております。ただ、広聴広報、ちょっと素人で分からないので、皆さんと相談しながら進めたいと思います。

(記者) とりあえず幹事社以上です。各社さん、質問あればお願いします。

(記者) まず議長からお尋ねしますが、結局議長選挙の結果でですね、32票っていう

数字なんですけど、これについての受け止めはどうですか。

(議長) それは数が少なかったと、こういうこと。

(記者) 議員が47じゃないですか。令和で調べると、30票代ってのは今回初めてなんですね。平成のときに前田さんが31票ってのありますけど、歴代の中でも30票代の議長というのは非常に数が少ない、得た票がですね。そこからいくと、お二人とも円滑な議会運営っておっしゃられますけど、ただこの出発点がこの票では、ある意味その円滑な運営に黄信号が付いてる感じがするんですけど。その辺どう受け止められていますか。

(議長) それは私の不徳の致すところかなと思っておりますが、そういう考えの方もいらっしゃるわけですから、そういう皆さん方の意見も取り入れながら、円滑な運営に努めていきたいと考えております。

(記者) 仮にその、少数会派の取り扱いってのはどうされますか。

(議長) 少数会派の皆さん方がいろんなご意見お持ちだと思いますけども、ぜひ、議長室オープンにしておりますので、来ていただいてご意見を賜りたい、そんなふうに思っています。

(記者) 同じく副議長が議長選にもかかわらず、津田さんのほうに11票入ってるんですけど、これをどう受け止められます。

(副議長) 私から答えることはありませんけれど、自分がやったことの反応なのかなと思いますが、ただ一番自分が大事にしていたのが、新政さん、それから自民党会派で草莽さん、公明党さんからの推薦をしていただいたので、藤田議長もそうでございますけども、その方々がしっかりと票をいただきました。プラス、自由民主党の中からも、多分何名かの方が投票していただいておりますので、その方々にしっかりと応えてまいりたいなと思っています。

(記者) 数からいけば自由民主党の中から、藤田議長であるとか津田さんに入れてない、1票しかないんですけど。それからいくと、あとの方は今回の正副議長候補には反対だというふうな意思表示をされて、元々事前の段階で、津田さんが議長に出られるなら、自民党系3派プラス公明で合わせて全部取るというふうな動きもあったと思うんですけど、最終的に津田さんが副にまわられて、議長を藤田さんがなられたんで、こういうちょっとイレギュラーな数が出たと思うんですよね。それについて、津田さん自身も、今後その円滑な運営っておっしゃってるんで、そこからいくとそこところにちょっと、黄信号みたいな付いてるじゃないですか。そこはどのようなふうに関後その、特に自民党系、他の2派ですね、そこについてはどのような接し方をされますか。

(副議長) 私の議会観は全然変わってなくて、かつて冒頭に言いましたように、過半数を取れば正副独占する、独占したからまた独占でやられるっていう、そういった議会の歴史がありましたけれども、約10年ぐらい前から、一つの会派が過半数を取っていない状況の中で、議長独占する・されるということはあってはならないと私は思っていました。そんな中、正確には8年前でございますけれども、これがすべて正しいということではないんですが、正副を分けながら議会運営に当たるということがベターではないかっていう考えのもと、今回も、この4年のスパンでいくと、1年目は自民、2年目は新政、3年目は自民、服部さんが議長にならせていただきましたので、4年目は第1会派の新政から議長に出るのは適当ではないかという思いを持っておりました。私に議長ということでございますけれども、所信表明のときにも言わせていただきましたけれども、基本は副議長をやってから議長をするものだと思っています。また私も、自信がないっていうのかどうか分からないですけど、自分の能力だとかそんなことを考えても、副議長からスタートするほうが自分にとってもいいのではないかと考えております。以上です。

(記者) 副議長やってないからっていう、所信表明のときの質問に対して、田中さんでしたっけ、ご質問に対して、議長のような挨拶だから本来議長に出るべきじゃないのと、津田さんは副議長やってないからっていう話ですけど。ただ自民党系会派で副議長やってなくても議長になった人がいるわけで、多分最初に走ったのは新政みえの田中覚さんだと思うんですけど。議長、副議長やらないで議長になられたのはね。それからいくと、中嶋さんも、それと青木さんも副議長なしで議長になられてるんで、そこは副議長必ずしもやらなきゃいけないってことじゃなくて、6という期数からいったら十分その資格はあるんじゃないですか。

(副議長) まず逆に言うと、副議長やってはならないっていうこともございまして、さっき副議長やらない方を言われましたけども、服部さんは副議長やってますし、中森さんも副議長やってます。なってる人になってない人、何人かいますので、私としてはまず副議長に立候補させていただいて、藤田議長からも勉強をさせていただいて、議長のチャンス、いつになるかわかりませんがそういうチャンスがあったらいいのかなと思いますけど。

(記者) いずれ議長の、もしそういう話があったらそこには、議長はやるという意味はあるわけですね。

(副議長) はい。世間からはなんか津田さん議長やりたくないんだって言われますけれども、そんなことはないので、いずれそういう時期があったら、多分手を挙げるんだと思います。

(記者) 津田さんのお若い頃からとかあるいは世間で言うところのあれを聞くと、津田さんというのは、役に対して執着心がないと、あんまりそういうものにこだわらないんだっていうふうな、むしろプラスの意味で聞いているんですけど、だからあんまりその議長に今回も執着しないのかなっていう感じもしたんですが。一応、今後においてはやっぱり議

長っているのをおかれてるわけですか。

(副議長) 私ばっかに質問されるのあれですけど、いずれそういう時期があれば、手を挙げるときも来るのかなと思いますけど、ちょっと先ではないかなと。

(記者) さっき8年ぐらい前、そこからそういうような、ある程度、自民で独占じゃなくてっていう時期があったとおっしゃいましたが、実はそれって平成15年の役選のときにそういうことが起きてるわけですね。岩名さんが自民党の中で正副も取れるのによって、議会ってのは当時51ですけど、それが一つになって初めて知事部局に対抗できるんで、正副独占はあかんって言って、結局その当時いらっしゃったベテランの議員達とか、あるいは若手で、後に鳥羽市長になった木田さんとかが反対されて、結局岩名さんは藤田正美さんを連れて出られて、そこへ末松さんとかも希望されて、少数会派の未来塾を作って、未来塾が主導して、あと23年ぐらいまで、岩名さんが要は四日市市長選に出て、県議会引退されるまで、少数会派がキャスティングボードを握ってたじゃないですか。だからすでにその先例はあるわけだけど。それを、バラバラだったのを、津田さんがある程度定数問題の後にですね、まとめて大きな会派を作ったじゃないですか。でも去年津田さん自身がそれを壊して5人の会派作りましたよね。この動き方ってのは何なんですか。見る側としては一貫性がないような気がするんですけどね。

(副議長) 一貫性がないように思う人、言われる方はいます。私も承知してますけども、さっき言いましたように、私は、一つの会派で過半数取ったから独占するのではなくて、やっぱり自民系、そうじゃない系が正副を分けるべきだと思います。それは8年間ずっと変わっていませんので、今回も非自民系の新政から議長。自民系のうちから、会派が違うので自民系であればうちから出したいと思うのは自然だと。だから、自分の中では一貫してこの役選に当たっているつもりです。

(記者) 自民党本部のほうで、特に県連会長の田村さんがかなりこれをお怒りだって聞いて、2回目のときにかなりお叱りされて、もう勝手にしろっておっしゃったので、津田さんが勝手にしろという許可をいただいたという形で、副議長で押し切ったっていう形になってるんですけど。その辺のことを含めてですね、今後党県連で問題になる感もあるじゃないですか。15年の岩名さんのときに、除名すべきだと言って急先鋒だったのが水谷隆さんと小林正人さんで、そこに津田さんもある程度反対はされなかったじゃないですか。それからいけば今回ですね、党除名の党紀委員会にかかる可能性もあるんで、その辺のことについてどう思います。

(副議長) 田村さんと私の会話について、記者が言われてることは正確ではないと思っ  
ます。

(記者) 私は漏れ聞くだけですから。元々記者ってのは漏れ聞くだけなので。

(副議長) 2人の会話はいつも1時間2時間喋るときもありますけれども、よく怒られるときもありますけれども、意外とその国家のこととか、全体のことだとか、家族のこととか脱線しながら結構話すときがあって、今回については詳しい内容は差し控えたいと思いますけど、記者が言われた内容ではないことは確実。

(記者) 私が自民党の国会議員含めて聞いている話では、結局衆院選で自民党が3分の2取っていると。なおかつ、ただしこの1年間は、地方選は負けてると。首長を含めて。だとすればその統一地方選に、来年の、そこに危機感を持ってるので、できればその統一地方選のところの下準備として、都道府県議会の三重県正副議長とか、副はともかく議長は取りたいという話があって、党本部からそんな指示も来てるんで、逆に言ったらそこに田村さんも拘られたから今回は議長取るべきだという話をされたけど、津田さんが、いや副でいきますっていう話になってるので、そこはおかしいんじゃないかっていうことの意向を受けて、だからその議長選にもかかわらず津田さんが11票入ってるっていう、この自民党系の議員が入れたっていうのはそのこの意思の反映じゃないですか。

(副議長) 記者が得られる情報は間違ってると思います。田村さんから、党本部から何々があつたっていうことは一言も聞いてないので。

(記者) だから田村さんだけの話じゃなくて、他の国会議員もいらっしゃるんで、それを取り混ぜての話です。

(副議長) 党本部からそういう指令があれば、私に会長なり、あるいは誰々から、その旨の報告というか情報提供があると思いますけども。

(記者) だって比較的県連の役員会って出られないじゃないですか。幹事長のときは結構出られてたけど。

(副議長) だからこの役選に当たって、当本部からこうしなさいっていうものがあれば、その旨を私に誰かが、幹事長なり会長なり伝えてくるとは思いますけども、そんなことは初耳です。

(記者) そういうことにしときましょう。

(副議長) 一切なかったです。

(記者) 以上です。

(記者) 津田さんの言う、正副議長を分け合うというお考え方であれば、例えば副議長のポストを、草莽だったりとか自由民主党会派と相談して調整するっていうことで、自由民主党としての融和を図るっていう考え方もあったのではないかなと思うんですけど。その

辺りの経緯であるとか、調整であるとかっていうのは実際あったんでしょうか。

(副議長) 役選について、私の知らない新政さんと自由民主党さんの話し合いだとか、ここどここの会派と話し合ったっていうことは言えないですけども、あろうかと思いません。でも最終的には、今まで、自民、新政、自民、新政、二つの会派で役職を分けた、自分の信念というか考えに基づいて、決めさせていただいたということです。

(記者) あと一つ聞き忘れた。私は昨日の所信表明で、広聴広報を一度も委員やったことないっての初めて知りましたが、それはなぜなんですか。普通、津田さんて市を経て県議になったわけじゃなくて、いきなり県議ですよ。

(副議長) そうですね。

(記者) 普通はそこに必ず入るじゃないですか。6期もやられてれば。それを避けられて、あえて避けてきたんですか。それとも僕はやりたくないよっていうのが周りを、お父さん県議会議員もやられた方なんで、その息子さんってことで周りが遠慮してたっていうことですか。

(副議長) 広聴広報会議っていつからスタートしたんですか。どうでしょう。不正確なことは言うべきことではないので、調べてまた報告をさせていただいてもいいですか。

(記者) 津田さんは、県議になられたときは広聴広報会議ってなかったですか。

(副議長) 覚えがない。少なくとも、みえ高校生県議会だとかそういうのはなかったですね。

(記者) なられたの平成11年ですよ。

(事務局) 広聴広報会議が設置されたのは平成18年12月。

(記者) じゃあ7年経ってる。津田さん11年でしょ。当選は。

(副議長) 11年です。

(事務局) 副議長が就任されたことがあるかどうかはすみません。ちょっと今手元では分かりません。

(副議長) 11年で当選して、16年で県議会を辞めて、7年浪人して戻ってきた。その時は3期生なので、広聴広報会議のメンバーではなかったっていうことだと思います。

(記者) あれは3期生がはまるようなその委員会ではないってこと。

(副議長) 大体、1期2期の方が中心になっていると思います。

(記者) でも谷川さんなんか3回目でやってますよね。

(副議長) そうなんですか。それは立派ですね。

(記者) そこがある程度未経験でこれから勉強されるってことなんですけど。

(副議長) すみません。

(記者) そのときに、高校生県議会とかあるいは出前講座とか、そういう担当じゃないですか、副議長。どういう形で今後進めていくっていう、過去のものを含めて、ここが不足だからこうやりたいとか何かそういうプランはあるんですか。

(副議長) 素人で全く分からないので、それは委員の方々と相談しながらやります。

(記者) 6期の人間に素人だと言われても、県民は怒ると思います。

(副議長) それはちょっと何とも言いません。すみませんっていう。

(記者) 今後の話ですか。委員の方と協議したいと。

(副議長) 相談しながら進めます。

(記者) 分かりました。

(記者) その他どうですか。議長他に何か言い残したことは。

(議長) ご質問いただければ、お答えさせていただきます。

(記者) そういう点で言うと、議員としての任期満了までの最終ということになりますけど、そういう点で議長にこのタイミングで就任したということへの受け止めいかがですか。

(議長) 重責も重責ですけども。選挙の準備もこれ大変だなという感覚でございます。正直な気持ちを喋らせていただきました。

(記者) 来年、県議選はお出になるんですか。

(副議長) ポスター貼ってますよ。

(記者) この前、副議長のときに2千票減らしたとおっしゃったじゃないですか。議長やると、なんか票減るんじゃないかみたいなようなこと言われたじゃないですか。

(議長) そういう意味で大変です。

(記者) 来年はお出になるんですね。

(議長) そのつもりです。

(記者) 分かりました。

(記者) もちろん、副議長も。

(副議長) 私は1万票減らしてますから。

(記者) いつ。

(副議長) 前回。

(記者) この前の選挙。

(副議長) 出るつもりです。

(記者) よろしいですか。以上となります。ありがとうございました。

(議長・副議長) ありがとうございました。

( 以 上 ) 14時46分 終了